

ときめき人

Tokimeki bito



「舞」と「真衣」。 その出会いは 偶然ではなく 必然。

登米町・前小路

小山 真衣さん

おやま・まい
2001年生まれ 血液型/AB型

Profile

登米中3年。2013年に登米町岡谷地神楽保存会に入会し、週1回の稽古で汗を流している。昨年、市内の介護施設で初舞台を踏み、人前で舞を披露する機会が増えてきている。好きな教科は数学。理由は「数学は必ず答えが出るから」。趣味は友達と遊ぶこと。両親と3人家族。

明治30年代に、東和町嵯峨立神楽が流伝し、創設された登米町唯一の神楽「登米町岡谷地南部神楽」(以下、岡谷地神楽)。保存会々員は現在11人おり、小山さんは唯一の中学生として活動している。

小山さんは「神楽は難しいけど、きれいに舞えたときがすごく楽しい」と魅力を語る。

神楽を始めたのは3年前。祖母京子さんの静岡県函南町在住の同級生が、岡谷地神楽と、とよま囃子を招待。真衣さんは、とよま囃子の一員として参加し、遠く離れた静岡で初めて岡谷地神楽を見た。

その時の演目「三番叟」に釘付けとなった。三番叟は、式舞の演目の一つで、日本神話を題材にしている。全身を大きく使ったダイナミックな動きと、指先まで神経の行き届いた繊細さに、一気に引き込まれた。舞手が女性と知り「自分も舞いたい」と、

すぐに保存会へ入会した。

初練習は、神楽の基本動作「足の運び」。見ると簡単そうな動きは、実際にはかなり難しく、小山さんは「足が何回も絡まりました」と当時を振り返る。その後、練習に欠かさず参加し、めきめきと上達。三番叟を舞うまでに成長した。

「真衣ちゃんは影で努力する子。本人は口にしませんが見えないところで努力しています」と話すのは渡邊有紀子さん。渡邊さんは、小山さんが神楽を始めるきっかけとなった三番叟の舞手。入会以降、小山さんは渡邊さんを姉のように慕っている。

「神楽はずっと続けたいし、いつか有紀子さんのように三番叟を舞いたい」と笑顔で語る小山さん。

「舞」を追求する「真衣」さん。神楽との出会いは、その名の通り必然だったのかもしれない。

編集後記

▼広報コンクールの表彰式に出席し、全国の広報マンと情報交換。彼らの仕事に向き合う姿勢や考えに、非常に刺激を受けた。負けないと思った。そして、多くの仲間たちが異動で広報を離れた。住民との信頼関係を大切に続けた彼らの後姿を忘れない。(及川)

▼3歳6カ月健診のむし歯のない子の写真は広報に初めて載る機会。パパ、ママのこれまでの努力が分かるのですてきな写真を撮りたいと思っています。しかし、自分が納得できる写真はあまり撮れていません。保護者の皆さんの協力をいただきながら、頑張っていきたいと思います。(千葉)

▼市内では、毎年いろいろなイベントが開催されています。夏はお祭りや花火など、楽しいイベントが盛りだくさんのシーズンです。イベントは、毎年開催されても、毎年違う顔を見せ、参加者もさまざま。その時、その場所で見られない一瞬を逃さないよう、記録していきたいですね。(田代)



モバイルとめ
(携帯電話版ホームページ)
<http://www.city.tome.miyagi.jp/>



登米市メール配信サービス
(防犯や防災、イベント・市政に関する情報をメールでお届けします。)
<http://tomecity.mail-dpt.jp/>

